

これで生きていける!

「巨大な堰の全貌が見えた時、皆がしばし作業の手を休め、うっとり眺め入りました。敷きつめた巨礫を流れる水が余りに美しいのです。説明抜きに、誰にでも分る美しさです。それは人と自然が和解した瞬間でもあったでしょう。また、命に直結する清らかな美です。『これで生きていける!』多くの村民は、そう思ったと言います。」

——中村 哲 (ペシャワール会報115号、2013年)

アフガニスタンの苦難は続く

——干ばつ、地震、大洪水、そして経済制裁

PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)総院長/ペシャワール会会長 村上 優まさる

八月下旬の大洪水

アフガニスタンはつくづく多くの苦難を背負って、現在があるのだと再認識しています。二〇二二年は、前年以上に干ばつの深刻な影響が出ると予想されていました。クナール河の水位は、PMSが測定を始めて以来、最低のレベルで推移していました。その原因は昨年冬の雪が少なく、雪解け水で水位が上がる時期に來ても上がらなかつたことに加えて、降雨も少なかったことが考えられます。

一方で六月二二日にアフガニスタン東部で地震があり、ホースト州の大きな被害が報じられました。この頃から局地的なゲリラ豪雨があり、PMSの活動地域でもマルワリード用水路に被害が出て、そのたびにPMSスタッフが出勤して対応しました。八月二五日からの豪雨は広範囲だったようでクナール河の水位が一気に上がり始めました。十二年前、「二〇一〇年洪水」と中村

医師が呼ぶ百年に一度の豪雨があり、それ以降はこの時の水位に対応できる灌漑施設の造成(取水口、護岸、遊水池の設置など)を目指してきました。

今回はこの二〇一〇年洪水を超える水位でしたが、何とか持ちこたえて大規模な氾濫は防ぐことができました。人的被害はなく、家畜も避難させて無事でした。しかし護岸が崩落するなど多数の被害が出ており、被害の全貌については水が引いてから入念な調査が行われる予定です。

郡より避難指示が出ているなか、カシコート堰周辺で見守っていた村の青年たちは、重機とともに駆けつけたPMSスタッフの登場を、「PMSが来た!」と歓声をあげて迎えたそうです。PMSへの信頼感が嬉しかったと報告がありました。バルカシコート事業地周辺の村も谷あいには設置された二七基の砂防堤により、土石流の被害は防ぐことができました。長老が谷を見て「洪水はどこに行った」と驚いた様子など、喜び